

# 蜃気楼

——或は「続海のほとり」——

芥川龍之介



或秋の午頃ひるごころ、僕は東京から遊びに来た大学生のK君と一しよに蜃気楼しんきろうを見に出かけて行つた。鵜沼うげぬまの海岸に蜃気楼の見えることは誰たれでももう知つていゝであらう。現に僕の家うちの女中などは逆まに舟の映つたのを見、「この間の新聞に出ていた写真とそつくりですよ。」などと感心していた。

僕等あいかわらずは東家あずまやの横を曲り、次手ついでにO君も誘うことにした。

不相変赤シャツを着たO君は午飯ひるめしの支度でもしていたのか、垣越しに見える井戸端にせつせとポンプを動かしていた。僕は秦皮樹とねりこのステッキを挙げ、O君にちよつと合図をした。

「そつちから上つて下さい。——やあ、君も来ていたのか？」

「O君は僕がK君と一しよに遊びに来たものと思つたらしかった。」

「僕等は蜃気楼を見に出て来たんだよ。君も一しよに行かないか？」

「蜃気楼か？ ——」

「O君は急に笑い出した。」

「どうもこの頃は蜃気楼ばかりだな。」

五分ばかりたった後、僕等はもうO君と一しよに砂の深い路みちを歩いて行つた。路の左は砂原だつた。そこに牛車うしぐるまの轍わだちが二すじ、黒ぐろと斜めに通つていた。僕はこの深い轍わだちに何か圧迫あつに近いものを感じた。遅たくましい天才の仕事の痕あと、——そんな氣も迫つて来ないのではなかつた。

「まだ僕は健全じゃないね。ああ云う車の痕を見てさえ、妙

に参つてしまふんだから。」

○君は眉をまゆひそめたまま、何とも僕の言葉に答えなかつた。が、僕の心もちは○君にははつきり通じたらしかつた。

そのうちに僕等は松の間を、——疎まばらに低い松の間を通り、  
ひきしがわ引地川の岸を歩いて行つた。海は広い砂浜の向うに深い藍色  
に晴れ渡つていた。が、絵の島は家々や樹木も何か憂鬱ゆううつに曇つ  
ていた。

「新時代ですな？」

K君の言葉は唐突だつた。のみならず微笑を含んでいた。

新時代？ ——しかも僕は咄嗟とつさの間にK君の「新時代」を発見  
した。それは砂止めの笹垣ささかきを後ろに海を眺めている男女だつ  
た。尤も薄もつといインバネスに中折帽をかぶつた男は新時代と呼  
ぶには当らなかつた。しかし女の断髪は勿論もちろん、パラソルや踵かかと

の低い靴さえ確に新時代に出来上っていた。

「幸福らしいね。」

「君なんぞは羨しい仲間だろう。」

○君はK君をからかったりした。

蜃気楼の見える場所は彼等から一町ほど隔っていた。僕等はいずれも腹這いになり、陽炎の立った砂浜を川越しに透かして眺めたりした。砂浜の上には青いものが一すじ、リボンほどの幅にゆらめいていた。それはどうしても海の色が陽炎に映っているらしかった。が、その外には砂浜にある船の影も何も見えなかった。

「あれを蜃気楼と云うんですかね？」

K君は顚を砂だらけにしたなり、失望したようにこう言っていた。そこへどこからか鴉が一羽、二三町隔った砂浜の上

を、藍色あいらろにゆらめいたものの上をかすめ、更に又向うへ舞まい下さがった。と同時に鴉の影はその陽炎かげろうの帯の上へちらりと逆まに映つて行つた。

「これでもきようは上等の部だな。」

僕等はO君の言葉と一しよに砂の上から立ち上つた。するといつか僕等の前には僕等の残して来た「新時代」が二人、こちらへ向いて歩いていた。

僕はちよつとびっくりし、僕等の後ろをふり返つた。しかし彼等は不相変あいかわらず一町ほど向うの笹垣ささがきを後ろに何か話しているらしかった。僕等は、——殊にO君は拍子抜けのしたように笑い出した。

「この方が反かえつて蜃気楼じゃないか？」

僕等の前にいる「新時代」は勿論もちろん彼等とは別人だった。が、

女の断髪や男の中折帽をかぶった姿は彼等と殆ど<sup>ほん</sup>変らなかつた。

「僕は何だか気味が悪かった。」

「僕もいつの間に来たのかと思ひましたよ。」

僕等はこんなことを話しながら、今度は引地川<sup>ひきじがわ</sup>の岸に沿わずに低い砂山を越えて行つた。砂山は砂止めの笹垣<sup>すそ</sup>の裾にやはり低い松を黄ばませていた。O君はそこを通る時に「どつこいしょ」と云うように腰をかがめ、砂の上の何かを拾ひ上げた。それは瀝青<sup>チヤン</sup>らしい黒棒の中に横文字を並べた木札だつた。

「何だい、それは？」 Sr. H. Tsuji……Unua……Aprilo……Jaro  
……1906……」

「何かしら？ dua……Majesta……ですか？ 1926としてあ



りますね。」

「これは、ほれ、水葬した死骸しがいについていたんじゃないか？」

〇君はこう云う推測を下した。

「だって死骸を水葬する時には帆布か何かなにかに包むだけだろ  
う？」

「だからそれへこの札をつけてさ。——ほれ、ここに釘くぎが打つ  
てある。これはもとは十字架じゅうじかの形をしていたんだな。」

僕等は今その時には別荘らしい篠垣しのがきや松林の間を歩いて  
いた。木札はどうも〇君の推測に近いものものらしかつた。僕は  
又何か日の光の中に感じる筈はずのない無気味さを感じた。

「縁起でもないものを拾ったな。」

「何、僕はマスコットにするよ。……しかし1906から1926  
とすると、はたち二十位で死んだんだな。二十位と——」

「男ですかしら？　女ですかしら？」

「さあね。……しかし兎とに角かくこの人は混血児あいのこだったかも知れないね。」

僕はK君に返事をしながら、船の中に死んで行つた混血児の青年を想像した。彼は僕の想像によれば、日本人の母のあ  
る筈はずだった。

「蜃気楼か。」

O君はまっ直すぐに前を見たまま、急にこゝろ独り語を言つた。それは或は何げなしに言つた言葉かも知れなかつた。が、僕の心もちには何か幽かすかに触れるものだった。

「ちよつと紅茶でも飲んで行くかな。」

僕等はいつか家の多い本通りの角に佇たたずんでいた。家の多い？

——しかし砂の乾いた道には殆ど人通りは見えなかつた。

「K君はどうするの？」

「僕はどうでも、……………」

そこへ真白い犬が一匹、向うからぼんやり尾を垂れて来た。

二

K君の東京へ帰った後、僕は又O君や妻と一しよのちに引地川の橋を渡って行った。今度は午後の七時頃、——夕飯ゆうめしをすませたばかりだった。

その晩は星も見えなかった。僕等は余り話もせずに入げのない砂浜を歩いて行った。砂浜には引地川の川口のあたりに火ほかげが一つ動いていた。それは沖へ漁に行った船の目じるしになるものらしかった。

浪なみの音は勿論絶えなかつた。が、浪打ち際へ近づくとつれ、だんだん磯臭さも強まり出した。それは海そのものよりも僕等の足もとに打ち上げられた海艸うみぐさや汐木しおぎの匂においらしかつた。僕はなぜかこの匂を鼻の外にも皮膚の上感じた。

僕等は暫しばらく浪打ち際に立ち、浪がしらの仄ほのめくのを眺めていた。海はどこを見てもまつ暗だつた。僕は彼かれ是十年ぜん前、上総かずさの或海岸に滞在していたことを思い出した。同時に又そこに一しよにいた或友いもがゆだちのことを思い出した。彼は彼自身の勉強の外にも「芋粥」と云う僕の短篇の校正刷を読んでくれたりした。……………

そのうちにいつかO君は浪打ち際にしゃがんだまま、一本のマッチをともしていた。

「何をしているの？」

「何つてことはないけれど、……ちよつとこう火をつけただけでも、いろんなものが見えるでしょう？」

○君は肩越しに僕等を見上げ、半ばは妻に話しかけたりした。成程一本のマッチの火は海松みるふさや心太艸てんぐさの散らかった中にさまざまの貝殻を照らし出していた。○君はその火が消えてしまうと、又新たにマッチを摺すり、そろそろ浪打ち際を歩いて行つた。

「やあ、気味が悪いなあ。土左衛門の足かと思つた。」

それは半ば砂に埋うずまつた遊泳靴ゆうえいぐつの片つぽだった。そこには又海艸の中に大きい海綿もころがつていた。しかしその火も消えてしまうと、あたりは前よりも暗くなつてしまつた。

「昼間ほどの獲物はなかつた訣わけだね。」

「獲物？ ああ、あの札か？ あんなものはさらにありはし

ない。」

僕等は絶え間ない浪の音を後に広い砂浜を引き返すことにした。僕等の足は砂の外にも時々海艸を踏んだりした。

「ここいらにもいろんなものがあるんだらうなあ。」

「もう一度マツチをつけて見ようか？」

「好いよ。……おや、鈴の音がするね。」

僕はちよつと耳を澄ました。それはこの頃の僕に多い錯覚かと思つた為だった。が、實際鈴の音はどこかにしているのに違いなかつた。僕はもう一度O君にも聞えるかどうか尋ねようとした。すると二三歩遅れていた妻は笑い声に僕等へ話しかけた。

「あたしの木履はっくりの鈴が鳴るでしょう。——」

しかし妻は振り返らずとも、草履ぞうりをはいているのに違いな

かった。

「あたしは今夜は子供になつて木履をはいて歩いているんです。」

「奥さんの袂たもとの中で鳴っているんだから、——ああ、Yちゃんのおもちやだよ。鈴のついたセルロイドのおもちやだよ。」

O君もこう言つて笑い出した。そのうちに妻は僕等に追いつき、三人一列になつて歩いて行つた。僕等は妻の常談じょうだんを機会に前よりも元気に話し出した。

僕はO君にゆうべの夢を話した。それは或文化住宅の前にトラック自動車の運転手と話をしてゐる夢だった。僕はその夢の中にも確かにこの運転手には会つたことがあると思つていた。が、どこで会つたものかは目の醒さめた後もわからなかつた。

「それがふと思ひ出して見ると、三四年前にたった一度談話筆記に來た婦人記者なんだがね。」

「じゃ女の運転手だったの？」

「いや、勿論男なんだよ。顔だけは唯ただその人になつてゐるんだ。やっぱり一度見たものは頭のどこかに残つてゐるのかな。」

「そうだろうなあ。顔でも印象の強いやつは、……………」

「けれども僕はその人の顔に興味も何もなかつたんだがね。それだけに反かえつて気味が悪いんだ。何だか意識の闕しきいの外にもいろんなものがあるような気がして、……………」

「つまりマッチへ火をつけて見ると、いろんなものが見えるようなものだな。」

僕はこんなことを話しながら、偶然僕等の顔だけははつきり見えるのを発見した。しかし星明りさえ見えないことは前



と少しも変らなかつた。僕は又何か無気味になり、何度も空を仰いで見たりした。すると妻も気づいたと見え、まだ何も言わないうちに僕の疑問に返事をした。

「砂のせいですね。そうでしょう？」

妻は両袖りょうそでを合せるようにし、広い砂浜をふり返っていた。

「そうらしいね。」

「砂と云うやつは悪戯いたづらものだな。蜃気楼しんきろうもこいつが拵こしらえるんだから。……奥さんはまだ蜃気楼を見ないの？」

「いいえ、この間一度、——何だか青いものが見えたばかりですけれども。……」

「それだけですよ。きょう僕たちの見たのも。」

僕等は引地川ひきじがわの橋を渡り、東家あずまやの土手の外を歩いて行つた。

松は皆いつか起り出した風にこうこうと梢こずえを鳴らしていた。

そこへ背の低い男が一人、足早にこちらへ来るらしかった。僕はふとこの夏見た或錯覚を思い出した。それはやはりこう云う晩にポプラーの枝にかかった紙がヘルメット帽のように見えたのだった。が、その男は錯覚ではなかった。のみならず互に近づくのにつれ、ワイシャツの胸なども見えるようになった。

「何だろう、あのネクタイ・ピンは？」

僕は小声にこう言った後、忽ち<sup>たちま</sup>ピンだと思つたのは巻煙草<sup>まきたばこ</sup>の火だったのを発見した。すると妻は袂<sup>たもと</sup>を銜<sup>くわ</sup>え、誰<sup>たれ</sup>よりも先に忍び笑いをし出した。が、その男はわき目もふらずにさつさと僕等とすれ違つて行つた。

「じゃおやすみなさい。」

「おやすみなさいまし。」

僕等は気軽にも君に別れ、松風の音の中を歩いて行つた。その又松風の音の中には虫の声もかすかにまじっていた。

「おじいさんの金婚式はいつになるんでしょう？」

「おじいさん」と云うのは父のことだった。

「いつになるかな。……東京からバタはとどいているね？」

「バタはまだ。とどいているのはソウセエジだけ。」

そのうちに僕等は門の前へ——半開きになつた門の前へ来ていた。

蜃気楼 ——或は「続海のほとり」——

底本：「昭和文学全集 第 1 巻」小学館  
1987（昭和 62）年 5 月 1 日初版第 1 刷発行  
親本：岩波書店刊「芥川龍之介全集」  
1977（昭和 52）年～1978（53）年

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999 年 1 月 24 日公開

2004 年 3 月 9 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制  
作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。